

プラトン国家篇研究序説

(国家篇における正義概念)

遠藤貞吉

は し が き

プラトンとその国家篇は恐らくいずれの国においても、我が国に於ても一般に教養ある人々には、已に常識となつて居る程に知られている。今更それについて説明解説を試みる必要はない。又それについてすぐれた詳しい研究書は夥しく公にされていて、敢えて未熟の私見をここに持ち出す余地もないかと思われる。今私がこの小論文を認めたのは、一般の教養ある人々に訴えたいためであり、又プラトン専門学究の眼に万一この小論がふれるような事があるなら、是正なり教示を仰ぎたいためである。蓋しプラトンとその国家篇があまりに知られているという事は、只形式的な表面的な型にはまつた解説的知識に満足して、自ら進んでその原著を読む意欲を全く缺かしめている。自ら虚心坦懐に原著をよむ事の興味利益必要に気づかしめないのかと虞れるのである。ここに原著というのはギリシア語^①原典に限るのでなく、邦語^②なり近代外国語による全訳をさしているのである。又たとえこのような原著をよんでも哲学史や解説の与えた先入的知識に捕われてよむならば、折角吾々が学ぶべき問題や考え方や、吾々のもつべき疑問や驚もなくしてすまされはしまいかと思う。

プラトンの対話篇は勿論それに含まれる、思想的内容の故に一般に教養を求める人々に読むことをすすめたいのであるが、殊に日常卑近な事柄から対話を進め、事物の核心にまで追求する、その物の見方、思考の進め方、緻密な表現の仕方について教えられ、生活に対する感慨見識、人間としての気品について深い感銘を与えられる事においては他の殊に中世近代の哲学的論著には比すべきものがないように思われる。

ところがこのような対話を邦訳なり、外国語訳を通してよもうとするととき、殊に邦訳を通してよもうとするととき、原典に忠実なろうとし、又つとめて平明な言葉を用いようとする苦心はよくわかるのであるが、殊にそれは原典と対照してみるとはつきりするのであるが、二度三度くりかえしよんでも仲々に文章語句の理解できない事が少くない。かようなときには諸外国語訳を参照し、場合によつてはギリシア語の辞書を助けとし、覚束ないギリシア語の知識をたよつて原典まで調べなくてはならぬ事もある。一般読者としては必ずしもギリシア語まで望めないであらうから、邦訳と共に何かの外国語訳を参照し、外国語における云いまわしの上に、邦訳における云いまわしを想像するならば、割合容易に理解できることも少くない。然しこのような点を強調しすぎると一般人士に一読再読をすすめたい主旨にそむく事になるであらう。このような事もあるが、それに拘らず、一般の人々もプラトンの対話は大体よんで理解し得、それにより啓発され激励され、又多大の文芸的感興をさえ楽しむ事ができることの方を強調したい。

ごく大体的にいえば国家篇の第一巻は主として正義を論じているが、それは第二巻以後の厳密な正義概念の分析への序論でもあり、国家篇全巻の序論でもある。この小論は便宜上第一巻における対話において取扱われた諸問題を分析し、それに私見私解を加えて、国家篇をよむための、又正義論の序説としたいと思う。

プラトン

プラトンが生れた紀元前四二九年はかの偉大な政治家ペリクレス——ペルシア戦争にギリシアを統率して強敵ペルシアを撃退し、ギリシア同盟の盟主としてアテネに華麗な古代ギリシア文化の花を咲かせたペリクレスが死んだ年であつ

た。その後アテネはペロポネソス役に於てスパルタと戦い驕傲と誤算により次第に衰頽の道を辿りつつあつた。プラトンはかくてその生長期に当り、アテネ民主政治の弊を眼前に眺め、それに対し不信の念を抱くに至つた。紀元前四〇五年民主政治遂に亡び、寡頭政治これに代り、プラトンはこれに対し幾分の望をかけたが、かの三十僭主の専横によりその期待を破られた。その間彼はシケリアのシラクサイの宮廷に招かれ、政治に参与する機会をもつたが、数回企てたこの政治活動も失敗に帰した。紀元前三九九年彼の傾倒した師ソクラテスがアテネの法廷で死刑の宣告をうけるに及んで、全く志を政治に絶ち、アテネの郊外アカデモスに地を得て学園を開き、彼を慕つて集つてきた青年学徒と共に真理の探究に専心した^⑤。しかしながら祖国アテネへの忠誠の念衰えることなく、国家の救済、理想的国家建設について、思念をめぐらしていた。それがこの国家篇となつて現われたので、時勢を慨するあまり時として理想にすぎ極端に流るゝ言説もあつたが、そこに現われた高邁の理想、厳正な倫理と教育観、緻密な思想は二千数百年を経た今日といえどもその意義と価値とを失わない。晩年の著法律篇には極端な思想は幾分緩和されている。

プラトンの理想国^⑥は要するに理想で、現実にはそれは存在した事もなく、又将来とても存在しないであらう。ではあるが、その性格は極めてギリシア的であり、この国家における諸般の制度の多くはその原型をギリシア諸都市国家中のいづれかに見出すものである。国家に関するプラトンの原理はギリシアの實際政治の根柢に流れているものであり、殊にアテネ、スパルタの社会生活における価値あるもの、偉大なるものを蔵めている。中にも下り坂にあるアテネに対し、上り坂にあつたスパルタには特に学ぶところ少くなかつたと想像される。そこに云われている事はたとえ実践しがたい理想のように見えても、単なる批判でも、単なる夢想でもなく、現実への関心は決して失われる事がなかつた。国家篇の価値は国家の体制における細部についての議論でなく、ギリシア文明に対する深き洞察にある^⑦。

国家篇について

国家篇はプラトンの凡ての著作の中で、法律篇を除いて最長篇であり、最もすぐれたものである^⑧。これを彼の他の作

と比較対照するならば、フィレボス、ソフィステスの方が現代形而上学に近い。ポリティコスが一番理念的である。国家の形態構成については法律篇の方がもとと明瞭である。芸術的な点からはシユムポシオン、プロタゴラスの方がすぐれている。然し見地の広いこと、スタイルの完全な事、世間知に富むこと、只一時代に限らず永遠的で古くして同時に新しい思想を包蔵する事、これ等の点において国家篇の上に出るものはない。そこには実に深い皮肉、豊かな諧謔、すぐれた比喩、劇的な力が見出される。そこに生活と思索、政治と哲学が緊密に結びついている。他の対話篇を国家篇を中心としてその周囲に結びつける事ができる。古代において達し得たかぎりの哲学の最高頂は実にここに見出されるといわれている。

国家篇において甚多方面の問題がとりあげられている。一貫して論ぜられているのは正義の概念であるが、それと連関して国家の体制、支配者防護者の教育、婦人と子供の国有が論ぜられている。教育については音楽と体操の任務、国家の立場からみた文芸が究明されている。宗教にもふれている。通観してそれは政治と道徳を論じている。本来倫理学であるか政治論的であるかとの問に対しては、プラトンにおいては道徳と政治とは便宜上区別されるにすぎない。正義の法則は個人についても国家についても、社会階層についても同じことである。しかし一義的にはこの法則は個人的で、畢竟政治は道徳の上に築かれる。国家篇の首巻において提起され、終巻近くで解決されている本来の問題は厳密に言えば道徳問題で、人間の生活を規定する正義の概念を規定することである。

対話的形式⑩

プラトンの著述は最後の作を除いて凡て対話の形式をとっている。この形式は当時広く採用されていた形式で、プラトンにのみ限るわけではなく、プラトンに始つたわけでもない。しかしまた対話はプラトンの師ソクラテスの教育方法であり、この点プラトンは師の影響を強く受けていたであろう。プラトンはパイトロスにおいて、書き流してある議論においては如何なる過程をふんで結論に達したかが示されていない。只書いたものからして得た哲学は實在性を缺く知

識にすぎないとのべていて、対話の形式を採ることの意義理由を暗示している。已にのべたように、出来上つた思想でなく、問題の提起、問答や批判や反駁や意見の開陳によつて進められる思惟の展開、互に論じ合う人々が同時に審判者として一致した結論に到達する過程が示されていて、それが吾々を啓発刺激し、本当の意味で吾々を教育するのである。

プラトンの対話の凡てにおいて、ソクラテスが対話者の一人、殊に主人役に立つている。対話の主要な部分は彼によりて語られ、対話の方向は彼によりて定められ、主要な結論は彼の口を通してのべられる。然しながらソクラテスの口を通して語られた思想は凡て現実のソクラテスの抱懷していたものとは考えられない。或る対話ではソクラテスの言葉はそのまま現実の彼の言葉であり、或る対話では現実の彼が明らかにそう云つたわけでないが、しかし彼の根本思想の発展と思われ、或る対話においてはそれはプラトンの思想である。^⑩ 実際又対話において占めるソクラテスの位置は、その対話においてのべられている思想と、彼が現実^⑪に抱いていた思想との関係によつて異ると見られる。

国家篇においてはソクラテスが終始一貫して、対話の主人役をつとめているが、その思想はプラトンの思想である。対話中の諸人物も実際にそれ等の人が会合したとは限られない。相会することが、年代的に地域的に多少無理と思われる人達を集めて対話せしめてあることもある。この手法は互に異なる或は対立する思想を比較対照して、その特徴を明瞭にし、又一つの問題を多くの角度から考察検討するに有効である。

国家篇の如き長い著作も対話を以て一貫し、場面においては何の変化のないに拘らず、又それはその対話のあつた翌日、ソクラテスが知人に前日の対話をそのまま伝える体裁となつていて「私が云つた」「彼が云つた」の連続で当然無味乾燥となり、読者をして倦怠させる筈であるのに、実際は対話者の態度の描写、物の言い振り、皮肉な或は諧謔的な口調、純真な好學心などいき／＼と写し出されていて、吾々の強い興味をつないでいく。「プラトンにおいてアリストテレス、スピノザ、ヒューム、カント、ヘーゲルの学的精神、フイヒテ、コントの予言者の熱誠、デカルト、シェリング、ショーペンハウエルの叙述の芸術美が、奇しくも融合されている」とウィンテルバント^⑫が評しているが、特に国家

篇はプラトンの一生中で、思想の円熟と劇的表現の妙とが結合した中期の作である。

構 成

ソクラテスが若きグラウコンと共にアテネからその南西四マイル計りなる海港ペイライエウスに祭礼を見に行つてかえりかけたとき、ポレマルコスに呼びとめられ、珍しい夜の祭も見えてかえる事にしてポレマルコスの家に至り、彼の父ケパロスに久方振り出會つて語る。年老いたケパロスに老年の心境をたずねる事から對話は始つて、正義の問題となり、ポレマルコスは一般世間の通説をもととしてソクラテスと問答するが結局そのような見解の不徹底が明かにされる。そのときその場に居合せたソフィストの一人トラシヌマコスが詭弁を以て正義は治者強者のための利益になる事をするにすぎないと主張するが、終には正義は徳であり、知恵であるとのソクラテスの意見を承認させられる。ところがグラウコンとその兄弟アディマントスは今までの正義の論究は正義から生じる影響結果からの論議で事の本质についていないから、改めて厳密に本質について正義を明らかにしてくれるようソクラテスに求め、ソクラテスは正義を個人についてと共に、それをもつと拡大して国家について究明しようというので、理想の国家の建設、守護者の教育、婦人の子供の国有制度、支配者即哲学者の教育を論じ、不正義と国家の墮落を語り、文芸論宗教論に終つた。国家篇は上記の對話を、その對話のあつた翌日数人の人々にソクラテス自ら語るといふ形式になつてゐる。

全篇の輪廓を示すならば、¹⁸⁾

正義とは何か、一、二の三六七まで

理想的国家 二、三六八―三七六。四、四二八―四四五。

理想的国家建設の三段階、第一段階、三、三七六―四一五。第二段階、三、四一五―四、四二七。五、四四九―四七一。

第三段階、五、四七一―七、五四一。

不完全な国家 八及九。

登場人物

惣じてプラトンの對話に登場する人物は實在の人物と思われる。然しそれが實際一つ處に會合して語り合つたか否か。それには恐らくプラトンの劇作家としての創作もありはしなかったか。時間的に地理的に彼等を同一場所に集める事の無理なものもある。テラー^④は國家篇の對話が行われたであろう年代を推定して、ベルシア役の勝利の余勢がまだ残つていて、少くも外觀上アテネは栄光と勢力の最高頂にあつた頃だとみている。蓋しポレマルコス^⑤の父がまだ存在中であり、登場人物の多くは少壮の男子達であるのに、戦争にふれた言葉は出ない。それと同時にアディマントスとグラウコンの兄弟は已にメカラ附近の戦に従軍して名譽を収めて居る。ソクラテスがケパロスに老人の心境をたずねているのをみれば、彼自身はまだ老年には達していなかつた。それ等の事情からして、對話の行われたのは、紀元前四二一年即ニキアスの平和時代であらうといつてゐる。それはソクラテスが五十才頃、プラトンはまだ七才位の時である。しかし實はさきに無雜作に云つてしまつたように、篇中のソクラテスはプラトンの思想を語つてゐる。換言すればこの篇はプラトンの劇的才能による創作によつて、その枠が与えられてゐるとせば、テラーのこの考証は無用であると考えられるかもしれない。今はそれを問題としない。

プラトンの著作の年代、作の真偽の區別、ソクラテスが實際のソクラテスであるか作爲のソクラテスであるか等については専門家の間に論争があり、ここでそれに立ちいる事はできもしないし、立ちいる必要もない。私としてはソクラテス＝プラトンの思想という事においてちつとも差支えないのである。

國家篇中に出てくる人物はプラトンの他に、トラシマコス、グラウコン、アディマントス、ポレマルコス、ケパロスが相当以上對話そのものにも参加している。

ソクラテスについては改めて語る要はない。彼が語る思想は實はプラトンの思想であるとしても、思想の基調、議論

の進め方、對話の相手との応待振り、皮肉諧謔的な言葉等は全くソクラテス的である。

トラシユマコス^⑤は所謂ソフィストの一人である。ソフィストは當時のアテネの民主政治において活動しようとする野心的な青年達に公的生活の準備を施した教師達である。即ち青年共に弁論の術を教え、それに附帶して倫理政治に関する知識を施した。一つの学派をなしていたのではないが、時代の産物として彼等の道德観政治観には共通傾向が認められた。即ち伝統に対し批判的否定的態度をとり、當時の思潮が大きく転換し、哲學的関心が自然界から人間に向つた時代に当り、相當の貢獻をなし、彼等仲間から敬意に価する思想家もでている。しかし此トラシユマコスは決して善い意味のソフィストの代表者ではなく、詭弁を弄して相手を云い負かす事にのみつとめ、政治や道德の問題について何等原理はもたず、善も惡も本質的には差別なく臨機応変に議論を戦わすればよいと考へていた、粗野な傲岸な男であつた。グラウコンとアディマントスはプラトンの兄達であり殊にグラウコンはよくソクラテスを解し、彼を尊敬する学徒であつた。トラシユマコスとの議論が問題の本質をはずれて、只枝葉にこだわるのにあきたらず、ソクラテスに嚴正なる學問的探求に向わんことを求め、ソクラテスの言葉に対し、然りとかな否とか答へつつ、時に應じて適正な批評を加え、徒らに自説を固執する事なく、相手の主張にも十分耳をかして、問題をいろ／＼の角度から考察するにつとめた。ソクラテスは彼の反駁によつて議論において方向を転換する事があつた。

ケパロスとポレマルコス。これは互に父子で、アテネ本来の市民ではなく、従つてアテネ市民特有の活動には参与しない。外国からここに移住してその保護を受けている人達である。ケパロスは前からソクラテスと交があり、正しい立派な老人である。

對話の一、三二七a—三三一d

夜の祭の時までとソクラテスはポレマルコスとアディマントスにすすめられ、グラウコンと共にポレマルコスの家に行く。そこで彼の父ケパロスに久振に会つた。旅の経験をつんだ人から、やがては自分も旅する地方の様子をきくよう

に、自分もやがてくる老の日のため老人の心境をきいておきたいと、ソクラテスがいう。ケパロスは答えて自分等老人共がより集つて何かと語り合うのであるが、或人は壮年時代の快楽を味う元氣なくなつた事を嘆き、又或者は老衰の故にとかく冷遇される事を悲しむ。然し自分としてはむしろ壮年時の狂暴な欲望から解放されて、心の自由と平静を楽しんでいる。思うに老いて冷遇されるというのも老の故でなく、心柄の故であるまいかという。ソクラテスはそれに対して、あなたがそうした心境で居られるのも、一つには資産が豊かであるためでないだろうか。それも自分一代で富をつんだ人はとかく、金の執着に苦しめられるものだが、あなたは大体の財産を親から譲られて、気持も鷹揚だからという事もある。ところでそういう点で富が何に役立つたであろうかと尋ねる。ケパロスは答えて、如何にもそういう事もある。富があれば貧故の不義理もしなくてすむし、神々の祭にも事缺かぬ。年とれば若い時に馬鹿にしていた来世の事も真に氣にかかる。然し財産のおかげで不正不義を犯すような事もなかつたので、未来の世に刑罰を恐れる必要もなく心裕かである。だがいくら富があつても思慮なくば心の平安の役には立つまい。思慮ある人には富はたしかに利益あるものであるとの意見をのべた。

この対話は正義の探究の端緒となるものである。この老人の云うところ、常識的な処世観として尤な事でもある。ケパロスが年老いて次第に来世の事が氣にかかる。若い間には死後の問題などむしろ嘲り笑つたものであるが、さすがに年をとると因果応報が切実に感じられ、或はまた来世がすぐ身近にあるので彼岸の消息がそれだけにわかるようになるのか、それとも老年の氣の弱さからか、ともかく今まで感じなかつた疑惑恐怖を痛感するといつてゐる。それ等の事はただ年齢のせいのみでもなく、性格氣質のせいもある。文明の進歩、或は科学の發達は宗教や神秘的思想を減退せしめると考える人もあり、殊に唯物主義的思想、マルクス・レーニン主義を抱懷する人達は宗教を嘲笑し排撃するけれど、宗教なり神秘主義的思想は左様に簡単に片づくものであらうか。宇宙の構造を冷静に科学的に解明して、そこに限界があるとしても限界なしとしても、いずれにしてもそれを不可思議に感じる事は、それ程に可笑しい事不合理な事で

あろうか。所謂靈魂不滅の問題はさておいて、肉体を地盤として働いていた精神作用が肉体が亡びると共に失せる。全く個的存在の如く見えて、しかも文明文化、歴史、というような全人類が衷心協力して建設している超個人的なものが厳然として存在する。それも個々人一切の死亡と共に消失するということは不思議でないのであらうか。不思議について得心のいくような解釈解決を計る事は知性的存在として当然の事でないか。来世のことは到底わからないとしても、時間的にも空間的にも大きな不思議、謎に包まれて、只管自己の無力を自覚し、厳肅な思いに充たされるとき、人がそれならせめて不義不慈を行うまいと決心するのも、窮余のしかし無理からぬ一つの解決であり、しかし現にあるような人間、人世を以てしてそれは到底不可能である事を知つて、ここに宗教的な道をたずねる事になる。要するに私の解する宗教とか神秘思想とかは、非知性的反知性的でないのは勿論、知性の不十分不徹底でも決してない。

對話の二、三三二。—三三六。

ケパロス老人の感懷から問題は正義に移つたが、このとき老人は神々の祭りのため家の奥へとひきとつて、對話は彼の息子ボレマルコスとソクラテスとの間に交わされる。

詩人シモニデスは眞實を語り他より預つたものは彼に返すのが正義であるといつてゐるが、或る人から金銭なり刃物を預つたとして、その人の氣が狂つてゐるときそれ等を返してやる事は正義といえるだらうか。それは却つて彼のためにならぬ事ではないか。してみると、シモニデスが人から預つたものというのは当然その人に対して為すべき事を意味するのであらうか。それぞれの人に対して為すべき事、それぞれの人にふさわしい事をなすのが正義なら、友にはその利益を計り、敵にはどこまで敵対してこれを害うのが正義であらうか。ところで医術は当然身体に与えられるべき薬、療治、食餌を与える術であり、料理術は当然食物に与えらるべき美味を、食物に与える術だとすると、正義は何を何に与える術だらう。それは各の人に彼に与えられるべきものを与える術、即ち戦いするとき味方を利し、敵をうちめす術であらうか。さて医術は病氣のとき役に立つもので、病氣のないときには用がない。正義も戦争の時には役に立つ

が、平和のときには無用というべきであるか。勿論平和、戦争いずれの場合にも役に立つものである。それなら農業の術が収獲のために有用であるように正義はどんな事に対して有用なのであるか。それは約束契約に關して有用であるとのポレマルコスに對し、ソクラテスは、契約といえど一つの共同的な活動であるが、たとえば囲碁という一つの共同的活動について考えてみる。囲碁において役に立つ共同者は正しき人でなくて、上手な碁手である。金錢關係の活動においても、金錢を有利に使用する事なら、それぞれの業者が巧なので、正しい人が金錢の使用に役に立つとはいえない。そこでポレマルコスは正義は金錢を使用せずに保管しておく場合に有用だといふのであるが、そんな正義は大きな意義も価値もないものであるとソクラテスは云う。

ポレマルコスのもちだした正義概念は、何しろ極めて不十分な、否皮相的な根拠に立つものであつて様々解釈の仕直しをしても、かように窮地に追いこまれ、終には医術に通じた人は病を直すのも巧だが、病を生ぜしめるにも巧であり、戦争の術に長けたものは守るのも上手だが虚につけこむのも上手である。正しい人が金錢の保管に上手なら、それを盗用するのも上手というわけかと手痛い皮肉をいわれる。それでも尚正義は友を利し敵を害するものであるとのはじめの主張を固執し、今度は事実と外觀とを區別する。

人は自分を利する人を友とし、自分を害する者を敵としているが、しかし友の中には自分を利すると考えているが、實際は利していないものもある。即ち見せかけの友、見せかけの敵もある。正義は友を利し敵を害するというのは、自分にとつて益があると思われるだけでなく實際に益になる人を利し、自分にとつて害ありと思ふのみでなく、實際に害をなす人を害することを意味するのであると抗弁する。ソクラテスはそれにしても正しい善い人はたとえ敵であれこれを害するような人だろうか。犬や馬でもそれがたとえわるい犬、わるい馬であつてもそれを害する事によつて、それ等が善くなるだろうか。正しい人は彼の正しさによつて人を正しくする。決して人をわるくする者でない。如何なる場合にもどんな人でも人を害する事は正しくないとの結論で、ポレマルコスとの對話は了る。

ソクラテスの議論はいつも類推に訴える。然し正確な意味の類推は或ものについてその多くの属性は明であるが、一つ論証も実証もできない属性が残されているとき、このものに類似する他の者が、その属性が凡て明かにされているとき、一つを除く凡て属性の間に一致があるから、残る一つについても同じよう的一致があるであろうと推測する事であるとするなら、ソクラテスのいつも用いる所謂類推は、このような類推ではなく、思考考察の具体的な手がかりを与えるための一例、示唆である。それ故所謂類推の結果到達したと思われる結論は、その実類推の結果ではなく、最後の裁決は各自がもつ理性或は良識のその場／＼における判断であるといつてわるいであらうか。

對話の三、三三六b—三四四c。

ソクラテスとポレマルコスとの對話をもどかしくきて居たトラシユマコスはその對話の終るのをまぢかねて、まるで野獸のように身を縮めて（彼等を）めがけて、ひつさらおうと飛びかかった。トラシユマコスは名に負う詭弁家、ソクラテスもさるもの実に辛辣な皮肉を以て応対する。

トラシユマコスが正義とは強者に利益になる事をする事であるという主張のあげ足をとつて、それならば闘技者プリユダマスにとつては牛肉をたべるのが益になるからというので、身体の弱い人でも牛肉をたべるのが利益があつて正しいのかとなぶつておいて、さていかなる政体であつても力あるものが政權を握り政府に益になるよう法律を作り、この法律に従うのが正義であるというが、一体政府当局即支配者は常に無過失とはいえない。彼等自らは自分に益があるつもりで法律を定めても、却つて不利益になるような法律がないとは限らない。そんな時にはかかる法律に従ふこと、即ち支配者、強者にとりて不利益を行うのが正義となるでないか、というソクラテスの議論に対し、トラシユマコスは成る程医者が病氣を見そこなう時はある。しかしかかる見そこないをしたその刹那において、この医者は厳密な意味で医者ではない。もし自己に不利な法律を作る支配者があるなら、厳密に言えばその刹那彼は本当の支配者ではない。厳密な意味でいえばやはり支配者即強者の法律を守ること、彼等の利益をなすことが正義であると強弁する。でも

医師は身体の病を医すことをつとめ、身体の利益を計るのだが、同様に支配する者も彼が支配する者共の利を計るで、自分等の利を計るのであるまいとソクラテスは駁する。

ところがトラシマコスThrasymachosは議論の方向を一転させて、凡ての人が幸福を求め、不正が如何に楽に又豊かに幸福を獲得するかを説く。そして不正の人が如何に幸福であるかは、その極端な例、たとえば僭主の場合をみれば明らかである。僭主のやるような事を小規模に部分的にやれば、盗み、冒瀆、詐偽と罵られる事を僭主は大仕掛けに又全体的に行つて、人々の財産のみならず、自由さえも奪つて、しかも非難される事もなく、幸福者と羨まれている。トラシマコスはこのように云いすて、その場を退出しようとしたが、ソクラテス等は彼をはなさず、尚も議論をつづける。トラシマコスは嚴格な意味での医者physicianは病を直すのを目的とし、医者としては金儲を目的とするものでない事を認めたが、牧羊者も本来の牧羊者としては羊そのもののためを計るもので、それを喰べるため或は売つて利を得るために世話するというのは、美食家なり商売人としての立場からの話である。一体それぞれの術はそれぞれ特有の働があるもので、又それによりてそれぞれ異なる利を与える。報酬を得ながら健康になつたからとて、それを医術とはいえない。その反対に医術を行いながら利益を取得しても医術を利益獲得術とはいわない。だからそれぞれの業者技術者は各独自の術によつて自分の利益を計るのでなく、その術を蒙る人の利益を計る。それと共に利益獲得術によりて、凡ての術者は利益を収める。支配或は政治も支配者自身のでなく、人民の利を計るものである。支配そのものからは自分のために何の利をも収めないから、支配者はその術の本来によつて、被支配者の利を計り、そのために自分のためにも報酬を求めるといふわけでないか。支配者をして支配の仕事させるためには一方報酬を以てそれをすすめ、他方罰を以て仕事の辞退を許さぬようにすべきであらう、という事でソクラテスは語を結ぶ。

これをきいていたグラウコンGlauconは最も善い人が支配者の位置につくことを躊躇する。それでその位置につかせるためには報酬か罰が必要であるというが、報酬はともかく、罰が必要とは如何なる意味であるかとソクラテスに尋ねる。これ

に答えて、実は利益も名誉も最も善き人を促すことはできない。只彼は罰を恐れてそうした仕事をひきうけるのである。罰というのはほかでもない。下劣な人間が支配者となるという事である。善良な人達の国では支配したい競争でなく、支配しまいとする競争があるとソクラテスはいった。

強者が定めた法律に従うこと、それは即ち強者の利益になる事をする事で、これが正義であるという考は、必ずしも二千五六百年の昔のギリシア、僭主時代に限らない。唯物史観からみれば法律は特権階級支配階級の利益擁護であり、正義の観念も同じ処から生じると考えるだろう。そのような特定の世界観に立たなくとも、法律や政治が屢一般民衆の犠牲において有力階級を擁護する事は吾々現にこれを眼前においてみる。尤もそれは必ずしも特殊の階級や個人を擁護するつもりでなく、国家的見地から政府がとつた方策に、特殊の階級なり個人が便乗したというのかもしれない。それにしてもその便乗が却つて乗物の進行を命令する結果になつてゐる。かように考えられると共に、ソクラテスのように政治はどこまでも一般民衆の利益を計るべきもので、如何なる悪法もはじめから一般民衆を無視して立法者の利益を計ると明示してゐない。たとえ表面ばかりにせよ、一般民衆のための如く粧わねばならぬ処に、恣意私慾の是認できぬことを暗黙の中に認めてゐる。

ソクラテスの職業観は甚だ興味がある。たとえば医術は只管病を医す事に専心すべきである。然し同時に人は生活の資を得ねばならぬ。資産獲得術と医術とは別である。所謂俸給或は給料によつて生活する人はこの二つの術を相当の程度區別し得る。これに対し売買或は商業ははじめから資産獲得術で、一口に職業に貴賤なしというが、今日の社会における職業には価値意義において本質的な相違があるようである。

對話の四、三四四d—三五四b

今までの議論をきいていたグラウコンは、ソフィスト流の不正なものが幸福であるとの主張に対し、正義の人こそ真に幸福であると信じ、それを確実に論証することをソクラテスに求める。ソクラテスでは「お互に同意しあつて考察

するなら、われわれ自身が裁判官であると同時に弁論家であるだろう」と、も一度トラシユマコスを一ひっぱり出して對話をはじめた。ソクラテスとトラシユマコスの間の對話をソクラテスの立場からまとめると。「君は正義を敢て悪とはいわないが、それはお上品な人のお人好しにすぎない。又不正はこれに對し分別のいい事だという。しかし正しい人は他の正しい人以上に余計にもつ事を欲しないし、正しい行以上に出ようとしない。ところが不正な人は彼の同類たる他の不正な人々以上に、又類を異にする正しい人々以上に余計にもとうとする。今音楽に例をとる。人々の中には音楽的な人がある。彼は音楽的でない人に比べて、音楽については思慮深く、従つて音楽についてはよい人である。さて音楽的な人は音楽に通じない人よりも余計にもつ事を求めるが、同じような音楽的な人以上にもとうとはしない。然るに正しくない人は彼の反對の正しい人以上にとろうとするのみならず、同類の正しくない人以上にとろうとする。してみると彼は音楽的な人と異つて、思慮のない人、従つてよくない人といえるだろう。

又、君は不正の国は不正により国威を張り、不正の人間は不正によつて名利を収めるというが、不正の国、又不正の団体もその内部に不正が行われるなら、相互の信頼助力は失われ、国や団体の内外に敵をもつて結局亡びる事になる。個人においてもその裏に不正を宿すなら、彼は身の内外に敵をもち亡びるに至るであらう。

又、何物もそれによつてはじめて、或は最もよく或る事がなされるというものがある。たとえば眼によつてはじめて視覚が営まれ、鎌によつて葡萄の剪定が最もよく行われる。即物にはそれに特有の仕事があり徳がある。徳によつて固有の働をもつともよくなす。魂の本来の仕事は考える事生きる事である。この働きは魂の本来の徳、それは正義であることを已に認めているが、この正義によりてその働きが最もよく営まれ、最もよく生き、即最も幸福であるといわねばならない。

已にいつたようにソクラテスの類推はそれを嚴密な意味の類推とするなら甚だ不十分であり、時には詭弁に類する事もある。彼の論法は、もし不正を原理とするなら必然ここに自己矛盾が含まれていて、この矛盾を譬を以て摘発していくというのであると思う。

ソクラテスは以上を以て一応正義に関する議を終えたものと考えたと云うのであるが、グラウコンが承知しないで、むしろ今までの議論を序論として、これからむしろ本論に入る事になる。

「お互に同意しあつて考察するなら、われ／＼自身が裁判官であると同時に弁論家であるだろう」のソクラテスの言葉は意味深い。それは吾々の日常生活における話合、議会制度、民主主義の原理でないか。各自が互に議論を戦わせ主張をのべることは当然であるが、互に同意しつゝ裁判官の仕事をもしているか、互に議論を戦わす事により、各自が反省して自説を質的に向上させ、一同が裁判官となつて最後の結論を求めているか。それなきために多数の暴横、少数の暴力、権謀術策、売収脅迫によつて事を処理しているのではないか。

これ以下の対話も主旨からいへばまだ三五七aから三六七eまでは序論で、ソクラテスが正義の考察を国という大きい文字でようとうと提案するあたりから本論と見るが妥当であろう。然し今はソクラテスのかの仮の言葉をそのままに受取つてここで筆をおく。今はことさらに本来の正義概念の分析にはふれずにおく。

註。註は凡て一般に教養を求める人々を対象として記した。参考書目も従つて文献を広く採る事をしないで、私が容易に入手し得たもの、且つ出版年代のあまりに古いものを除いてしるした。又参照する場合は煩をさけて、著者名のみを記す。

- ① ギリシア語原典。Platon's Opera (Clitopho, Republica, Timaeus, Critias) edited by Burnet, Clarendon, Oxford.
- ② 山本光雄・国家(世界大思想全集、哲学、文芸、第一卷)河出書房。
- ③ 岡田正三・ポリテイヤ、上下(プラトン全集、第七、八卷)
- ④ B. Jowett, The Dialogues of Plato Vol II (Republic, Gorgias, Parmenides), Clarendon, Oxford.
- ⑤ J. L. Davis & D. J. Vaughan, The Republic of Plato (Golden Treasury Series) Macmillan, London.
- ⑥ O. Apelt, Platons staat (Platon, Gesamliche Dialoge X) Felix Meiner, Leipzig.
- ⑦ A. Bailly, Dictionaire Gree-Frangais.
- ⑧ プラトン、伝記及び或は思想の全般。
- ⑨ 久保勉、プラトン(大教育家文庫)岩波
- ⑩ 長沢信寿、プラトン(西哲叢書)

クルト・シンガー (清水武明) プラトン三論

バーネット (出隆・宮崎幸三訳) プラトン 哲学岩波文庫

ヴァンデルバント (出隆・田中美知太郎訳) 大村書店

A. E. Taylor, Plato, the Man and his Work Methuen, London.

P. Shorey, What Plato said, University of Chicago Press.

G. M. A. Grube, Plato's Thought, Methuen, London.

Philp Leon, Plato, Thomas Nelson, London.

Zeller, Plato and Older Academy. (Eng. transl. by Alleyne and Goodwin) Longman & Green, London.

G. C. Field, The Philosophy of Plato. (The Home University Library) Oxford University Press.

Frederick Woodbridge, The Son of Apollo, Houghton & Mifflin, Boston.

A. Ed. Chaignet, La vie et les écrits de Platon, Didier, Paris.

Léon Robin, Platon, Felix Alcan, Paris.

Willamovitz-Moellendorf Platon. 2 Bde. Weidmann, Berlin.

Constantin Ritter, Platon, 2Bde. Beck, München.

Kurt Scuger, Platon der Griinder, Beck, München.

Heinrich Friedemann, Platon, Georg Bondi, Berlin.

Wilhelm Windelband, Platon, Fromman, Stuttgart.

E. von Aster, Platon, Strecker u. Schröder, Stuttgart.

Ferdinand Lion, Plato, Gustav Klipper, Stuttgart.

以上は私はその凡てをどこから、その多くを参考したという意味でなく、文献の名はそれだけでいつ誰の役に立つかもしれないと思つたので。

⑥ 国家篇・ギリシア語テキストは已に記したバーネット校訂の他に

B. Jowett, Plato's Republic 3 vols. I. Greek Text. II. Essays. III. Notes. Clarendon, Oxford.

参考書は

R. L. Nettleship, *Lectures of the Republic of Plato*. Macmillan, London.

William Boyd, *An Introduction & the Republic of Plato*, George Allen & Unwin, London.

J. M. Knox, *Plato's Republic*, Thomas Murby, London.

尚巴ビシメシた Apelt, Jowett の訳書を詳しく解説註釈が与えられている。

⑦ 在ヤリッ Boyd, pp. 3—4.

⑧ Jowett, *Republic*, Introduction.

⑨ Taylor, p. 265.

⑩ Boyd, pp. 5—7.

⑪ プラトニー一般参考書にあげたものの中にこの問題や著作の真偽、年代を詳しく論じたものがある。

⑫ Windelband, S. 39.

⑬ Boyd, pp. 195—196.

⑭ Taylor, pp. 263—264.

⑮ Boyd *The 'Personae' of the Dialogue* pp. 7—16.

⑯ ……よりも余計にもつとかとるについてその意味がはつきりしない。ソクラテスが正しい人は正しい人より余計に求めると言うかと問われ、トラシユマコスはその思わない。何故ならもしそうなら正しい人は御上品御人好しとはいえないだろうと答えている。そうすると「持つ」というのは収入とか利益を持つ事らしいのであるが、それなら正しい人は正しくない人以上に求め、又それを以て正しいと考えるというのはどういうわけであるか。もし未熟無知の人に比べるなら当然多くを要求すると云えるだろうが、正しくない人は自分の真価や努力不相応に求めようとする。正しい人がそれより余計に得ようとするとは何を意味するのであろうか。この辺り四五種類の訳を対照してみても、又原文によつてみても、理解されぬものがある。脱稿に近くジョーエットのレバブリク三巻を入手、その註釈篇によつて彼もこのあたりの議論はトラシユマコスの偏見を擲論したものであろうと解し、大体に大した意味がないとしている。

Endo, Teikichi

Introduction to the study of Plato's Republic.
(Prelude to his Conception of Justice)

Résumé

Plato's Dialogues are worth reading not only because of ideas contained in them, but because they teach us how to think, inspire us and charm us with dramatic power of expression. The Republic is to be recommended to people of culture to read, if not in original, in complete translation.

General remarks of the Republic, —its significance and position among other dialogues, its structure, themes discussed, personae of the dialogue etc.

Analysis and comment of "dialogues" in Book 1,—Dialogue with Cepharus (old people and life beyond, life of justice, use of riches), Dialogue with Polemarchus (To do people what is due to them; What is due to enemy; Socrates' analogy is not one in strict sense, but a way suggested to consider a problem.) Dialogue with Trasymachus. (Justice is to obey law instituted in favour of the stronger. Government in strict sense is intended in favour of subjects, not of rulers. Art of medicine and art of profiting, Art of government is solely for the sake of people. Trasymachus's and Socrate's view in our present day politics, Dialogue with Trasymachus again. (Injustice weakens a nation, a group, an individual. "Uniting offices of judge and advocating in person.")